『鋭すぎた名探偵』～真相編～ - 完結 -

雪月花。鳳仙花。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『鋭すぎた名探偵』～真相編～ - 完結 -

【Ｎコード】
Ｎ４２２３ＢＡ

【作者名】
雪月花。鳳仙花。

【あらすじ】
過去の作品『鋭過ぎた名探偵』の続きではなく書き直したバージョンです。と言うより当初からタイトル的にこっちの設定でした。
そして相変わらず本格推理では御座いません。

ある学園の昼下がり、俺の目の前に、多分人生で最大のピンチが訪れた……それは殺人事件、小説やテレビで聞き慣れた殺人事件……

断言しよう！　俺が先生に頼まれ資料室に入った時点で既に同級生の佐藤真理（さとうまり）は死んでいた。その後、俺は慌てて資料室から飛び出し近くにいた先生に事情を説明して先生と一緒に資料室に戻り、先生が警察に連絡を入れ、暫くして警察が駆けつけ第一発見者である俺は刑事に執拗な事情聴取をされようやく開放された頃には廊下の窓から見えた外は、もう日が暮れていた……誰も居ない廊下をぼんやりと歩いていると白いＡ４ノートの１ページを破り黒いマジックペンで

この学園の名探偵、二年の天乃宮真人をよろしく

０９０×××××××

と書かれ掲示板に貼ってあったポスター？　が目に止まった。そのふざけた内容に驚いた訳ではない……と思う、そう、ほんの出来心でその番号に俺は電話をした。

「お電話ありがとう御座います、こちら名探偵の天乃宮真人（あまのみやまさと）です」

（はや、ワンコールかよ！）

「えーと、ポスター？　を見て電話をした者ですが、一つ依頼を頼んでいいですかね？」

「いいでしょう。殺人事件を解いてこその名探偵！　望むところですよ」

（流石は名探偵、俺が殺人事件を依頼すると見抜くとは、やるじゃないか）

「そういえば依頼料の方は大丈夫ですか？」

（……依頼料？　俺は耳を疑った。そもそもこのポスター？　に依頼料の事なんて一言も書いてねぇーよ）

「ふむ、やはり払えないんですね。まぁ、当然と言えば当然かもしれませんね、カレーパンを人に譲る程に勇気が必要な事はないですからね……」

「……はっ？　カレー……パン？　だと？」

「はい、カレーライスではなくカレーパンです」

（こいつは、カレーパンを人に奢る事にそんなに勇気が必要なのか？　いや、それ以前にカレーパンが依頼料なのか！　いいのか名探偵がカレーパンで事件を解決して）

「フン、カレーパンなら好きなだけやるよ」

「マジっすか！！　……ごほん、いい判断です。それで現場は何処ですか？」

「二年C組の隣にある資料室です」

「では、そこら辺で会いましょう……」

そう言って名探偵は電話を切りやがった……そこら辺って何処だよ！？　と思っていた矢先に後ろから不意に誰かに声をかけられた。

「貴方が依頼人ですね。僕の明晰な頭脳がそう告げていますよ。貴方が僕にカレーパンをくれるとね」

待て、昼で授業が中止になり、今この学園に居るのは俺ぐらいだろう！　明晰な頭脳じゃなくても大体は予想が付くだろ。この時、俺にはある予感がした……この自称名探偵は馬鹿なんじゃないかと……そして振り返って俺は確信した。そこには学生服を着て頭にはテンガロンハットを深く被りサングラスを掛けた身長が百七十センチ位の馬鹿がいた。

「そう、僕がこの学園の名探偵、天乃宮真人です」

名探偵は名を名乗り終えると何故か、その場で1回周りサングラスを外し俺にウィンクしてきた表情はかなりのドヤ顔でイラッとした。

それよりこいつめっちゃ校則違反じゃないか？　注意されないのは、やはり名探偵の所以なんだろうか？　とそんな事を考えてしまった。

その後、俺も一応自己紹介を終え、名探偵に事件の内容を話す事にした。

先生に頼まれて次の授業に使う資料を取りに資料室に入ろうとしドアが開かなくて、職員室に鍵を取りに行き鍵を使って鍵を開けたら佐藤真理が死んでいた事。

刑事が話していた狂気はスポーツタオルによる絞殺であると言う事を名探偵に話した。ただ一つ、凶器であるスポーツタオルが俺の物である、と言う一点だけは伏せて。

「ふむ。なるほど　これは推理小説とかで有名な密室殺人って奴ですね」

確かに密室だった。資料室のドアは一つしかないし窓はあるが、資料室は二階にある。

「実に簡単な事件でした。犯人は最初からミスを侵しています。まず密室ですが、これはそもそも密室ではないんです」

えっ？　はや　もう解決編？　なんか不敵に笑ってるっぽいし、変なポーズをしながら話し始めやがったよ。

「密室じゃないだと？　確かに鍵は掛かっていたんだぞ」

「そもそも、その部屋に鍵をかける人はいないんですよ。貴方はドアに鍵が掛かっているフリをした。そして職員室に鍵を借りに行った。ドアを開けたら死体があったと騒いだ。違いますか？」

……あれ？　俺？　疑われてる？　確かに俺は先生に頼まれて資料を取りに行った、他にも授業で使うものが割と頻度にあるので普段は鍵が掛かっていない、そこは俺も違和感を感じていた。

「なんで、俺がそんな事する必要があるんだ？」

「実に明快にして簡単な理屈です。貴方が犯人だからです。貴方は最初から怪しかった　まず、殺された佐藤真理さんと貴方はかなり親しい仲だった。違いますか？」

俺？　俺が犯……人だと？　なっ！　な、何を言っているんだこいつ？

「まだ認めませんか？　僕は佐藤真理さん殺害に使われたタオルに小さく中野と書いてある事に気付きました。貴方の名前も確か中野でしたよね？」

俺は動揺していた。見た目と動きが馬鹿な名探偵の予想外に鋭すぎる推理に。

「ま、待て、待ってくれ、俺が犯人だったらなんで名探偵を呼ぶ必要があるんだ？」

名探偵はやれやれと言った感じのポーズを撮り、得意げに喋り始めた。

「貴方が僕を呼んだのは刑事が戻って来るまで暇だったからです！　警察がタオルを調べれば貴方がやったとバレるまでの時間潰しなんでしょう？　貴方の話しは購買で聞きましょうか」

俺は名探偵に引きずられ購買に連れて行かされ、カレーパンを買わされた。カレーパンを受け取った名探偵は俺の前から立ち去ろうとしていた所で俺はある事実に至っていた。

「待て名探偵。お前は凶器のスポーツタオルに俺の名前が書いてあると何故知っている？」

「……貴方がそう言ってたじゃないですか？」

「いいや、俺は敢えて自分が疑われそうだからその事はあんたに言ってない」

名探偵は手にしていたカレーパンを落としていた。

「あんたは鋭すぎたんだよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4223ba/

『鋭すぎた名探偵』～真相編～ - 完結 -

2012年1月11日09時46分発行